

「戦争と平和！」 第7回

天皇会見を見て

黒田 和代

12月23日は天皇誕生日、2018年は在位最後の誕生日会見とのこと。今まで取り立てて関心を持つことはなかったのですが、フェイスブックで友達が「感動的だ」と取り上げていたので、どれどれ、とインターネットで会見の一部始終を見てみました（全文掲載ページ「天皇陛下の記者会見」宮内庁

<http://www.kunaicho.go.jp/page/kaiken/show/25>）。

天皇の会見と言えば、いつも淡々とした語り口調で、退屈なイメージがあったのですが、今回は、時に涙をこらえ声を震わせてメッセージを伝えておられる姿に、正直ちょっと驚き、そして深い感銘を受けました。

メッセージには「平和」への強い思いが込められていたように感じました。「皇太子」という立場で終戦を迎え、そして「天皇」に即位して、その間、沖縄に11回訪れ「沖縄の人々が耐え続けた犠牲に心を寄せていく」思いは今後も変わらないこと。サイパン、ペリリュー、フィリピンのカリラヤに慰霊に訪れたことが忘れられないこと。そして自らの在位期間である「平成」

の日本が戦争のない時代として終わろうとしていることに安堵していること。

会見を見ながら、終戦から今日にいたるまで、もしかしたら日本中のだれよりも、先の戦争で犠牲になった命、そして「平和」であることに心を寄せておられる人かもしれないと思いました。

私は1963年生まれですが、物心

左側、小学校1年生の頃の著者
右側の子どもはいとこ。中央は戦争を体験した（母方の）祖父。
場所は祖父の家の庭です。

ついたころはまだ世間に「戦後」の気配がありました。周りの大人は何等かの形で「戦争」を経験しており、折に触れて子どもたちに、辛い戦争体験の話聞かせてくれて、そして「戦争をしてはいけない」と語っていました。

終戦記念日がある8月はテレビや新聞でも終戦特番が組まれ、戦争を二度と繰り返してはならないと後世に語り継ぐ、そんな雰囲気でした。学校の夏休みの宿題でも「近所の大人の戦争体験を聞き感想文を書く」というものがあつたことも覚えています。

それが、いつしか雰囲気が変わってきています。沖縄は、「日本で唯一地上戦となった場所」ではなく、白い砂浜と青い海が広がる常夏の楽しいリゾート地として紹介されます。

8月15日も、終戦よりもお盆や「夏フェス」の季節として、日本中いたるところで楽しい催しが満載。最近の若者は「終戦記念日」がいつだか知らない人も多いのだとか（『若者100人にアンケート調査、終戦記念日を「知らない」と答えた人が過半数を超過』ハフポスト http://www.huffingtonpost.jp/abematimes/815-syusen_a_23509090/）。

日本では今や、戦争を経験として全く知らない世代が社会の中核を担う年齢となってきています。戦争が始まってしまうとどんなことが起こるのか、戦争を語り継がれていない世代は具体的にイメージできません。若い世代にとって戦争は、外国の話であり、遠い昔のことであり、自分たちには関係ない、知る必要もないことになりつつあります。それは、直接経験がない語り継がれた世代である私から見ても、非常に心もとなく、心配な状況だと感じます。



天皇陛下のペリリュー島慰問写真

会見の中で天皇が「戦後〇〇年」という表現を何度も口にされているのを聞きながら、改めて、先の戦争が終わってからの年月を「戦後〇〇年」と数える意味を考えてみたいと思いました。そして、子どもや孫たちにしっかりと戦争の現実を伝え、平和の尊さが理解できる人になってもらわねばならないと思っています。